2018年度　第1回

**2018年度　　第36回　日本人間関係学会「関東地区会」研修会報告**

**本年度テーマ：「分断・孤立からの関係創生」**

**－関わりをつなぐ可能性を見出す－**

**「ﾋｭｰﾏﾝﾘﾚｰｼｮﾝ･ｽｷﾙﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ(Human Relation Skills Training)＝HRST」**

**第36回研修会テーマ　　「分断・孤立の根底を探る」**

**Ⅰ　開催日時　：　2018年5月12日（土）14時～17時**

**Ⅱ　開催場所　：　越谷市中央市民会館第９会議室**

**Ⅲ　課題提供　：　佐藤啓子**

**Ⅳ　司　　会　　：　杉本太平**

**Ⅴ　記　　録　　：　小林幾子**

**Ⅵ　参 加 者　：　　　６　名**

**＜趣旨＞**

　人間関係における分断・孤立を生み出す根底には、人が何を大切にし、他者とどう生きようとしているか、ということと密接不可分にかかわっている。

　本研修では、目下ベストセラーになっている著書『君たちはどう生きるか』（原作　吉野源三郎　マガジンハウス　2017年12月第11刷）を手掛かりとして、その根底を探る。

**＜キーワード＞**

分断・創生　関係創生の過程　補助自我　「君たちはどう生きるか」

１　今年度の本研修会のテーマは、「分断・孤立からの関係創生」である。明鏡国語辞典によれば、「孤立」とは、「他とのつながりや他の助けがなく、一つ又は、一人で存在すること」であり、「分断」とは、「一つにつながっているものを、断ち切って別々にすること」とある。また、「創生」とは、「新しく創り出すこと」である。

２　換言するならば、全体状況に焦点を当てれば、ばらばらになっている関係状況を、何らかのきっかけや方法で、関わり合いやまとまりを創っていくことであり、個人の側に焦点を当てるならば、孤立している状況から他とのつながりを創っていくこと、である。

３　このテーマの背景には、他とのつながりを創っていくことが「善いこと」である、という前提を洞察し得るが、中には、孤立していることを敢えて楽しんだり、面倒なこと・煩わしいことを避けるという意味（孤高に生きるなど）で、敢えて、つながりを求めない、という場合もある。

４　従って、人間としてどう生きるか、何に価値を置いて生きるか、ということと密接

不可分にかかわってくるが、ここでは、つながりあって生きることを「善いこと」と考え、以下のように図式化して考える。

1. 孤立的状況　　　　　　　②関係創生過程　　　　　　　③関係創生状況

**自己**

**自己**

**自己**

本研修では、②を明確化し③をどう実現するかが目的である

**＜展開＞**

**Ⅰ部　(14:00～15:00)**

**・課題提供者により用意された配布資料**概要を、参加者全員で読み合わせ、内容の確認をする。

**・参加者から、ストーリーの感想を聞く。**

　　○数十年ぶりに接した著者の格調高い、青少年への人生の送り方を示す文章であった。登場人物は、昔の選ばれた中学生ではあるが、人間関係や友情関係の理想的なプロセスに、関係創生状況に至る過程を考えさせる内容であった。自分の青少年時代は中々こうはいかなかったが、今読み返してもこれからをどうするかを考えさせられた。

　　○「油揚げ事件」で浦川君が「もういいよ」と止めにかかる姿や、コペル君がその後に浦川君の家を訪ねてその技を「すごい」と素直に表現できるところが印象に残る。人の良い所を認めて表現していくことが「関係創生」に繋がると感じた。

　　○「水の分子」という表現。この気付きとその意味を、教師としても自分の考えとして子ども達にも伝えられる大人でいたいと思った。

　　○「網の目の法則」という人と人との繋がり合いの理解、同じ間違いを繰り返さない態度、悪循環に落ち入った時に余計な感情や考えを一端止めることなど、様々なヒントが学べた。

　　○筆者の人間関係や心理の理解の深さに感じ入った。例えば、コペル君を「いたずら好き」のキャラクター設定にしたことも問題や原理に「気付く」力の資質として意図したものと考える。

【講師解説】

　　○②を促進するための重要な手がかりの一つに、「補助自我的かかわり」がある。補助自我的かかわりには、①監督的補助自我、②補助自我的補助自我、③演者的補助自我、④観客的補助自我、⑤舞台的補助自我、の役割があるが、参考配布資料中の著書に登場する主人公の叔父さん（母の弟）は、主人公にとっての「監督的補助自我」の役割を果たしている。

　　○関係的存在としての人間（水分子・網の目）という視点や原理の理解は、何でもないようなことであるように見えるが、重要な視点である。「おじさん」という存在はコペル君にとって、人間同士が融和して生きることの大切さや不調和を悪しく感じるような、コペル君の「その人らしい気付きをその人らしく表現する」ことを助ける存在、「補助自我」の役割を取っているとも解釈できる。「人間関係士」として、その役割の意味を理解しながら実践することができることが重要である。そして、自分の取った役割を説明できないとプロとはいえない。人間関係の在り方や繋ぐこと（関係創生）が善いことである。という考え方が前提とならなければならない。

**Ⅱ部　(15:10～16:30)**

**１．話題提供に基づく心理劇的場面の構成　　(監督：佐藤啓子)**

**展開１　町長選挙の場面**

●ある地方の中間都市で町長選挙が行われる。ある候補者が、みんなが集える総合施設をつくり、住み良い町にして、高齢者の生活を豊かにし、安心して暮らせる町にしたいことを公約として掲げ、当選した。それは、町民の信念でもあった。

**展開２　分断と孤立場面**

●町長が当選した後に、川向こうの隣町の施設を利用するための橋を架ける方が予算的にも手続き的にも合理的であるとの考えから、方向転換を提案し始めた。それは現実路線で合理的だと町長を支持する派と、町長の公約違反を咎め強固に反対する町民との間に分断が生じる。

　議会で、町長支持派と反対派に分かれて町長に対して質疑を行う。

公約転換を支援する町民の意見と公約違反をとがめる町民の意見の話し合い

**展開３　関係創生場面**

　●質疑の中で町長が何故方向転換をしたか、丁寧な説明を繰り返す中で理由が明らかになると同時に、町民のためのより良い選択は何か、共通の信念（優先事項・求めるサービス・生活の向上・過疎化対策）を見出していくプロセスが生まれる。

**〔心理劇での関係創生のプロセス〕**

丁寧な説明を繰り返していく（相互のコミュニケーションと意思の表明）

　　　　↓

多様な補助自我の存在（町長の立場・対立候補の立場・町民の立場など）

　　　　↓

共通の信念…関係創生の基盤（高齢者の生活をより良くする実のある方策）

　　　　↓

多様な補助自我の居る集団には分断・孤立は少なく、自然に関係創生が実現

しやすい

**２．感想・質問・意見（略）**

**Ⅲ部　(16:30～16:50)　　シェアリング・まとめ**

【会長解説】

　今回の研修では、「油揚げ事件」（いじめ）など集団と個の関係に成立する分断・孤立と、「雪の日の出来事」など集団と集団および仲間集団からの離脱としての分断・孤立、社会集団内に生起する分断・孤立など様々な視点からこのテーマを掘り下げ、そこからの関係創生はいかにして実現するかということを学びあう研修となった。特に、吉野源三郎著『君たちはどう生きるか』にある深い人間理解に改めて接し、参加者それぞれの体験や人間関係に照らして、深く掘り下げられた内容の濃い研修であった。

以上

**＜次回　定例研修会のご案内＞**

**開催日：平成30年７月７日(土)　14時から**

**開催場所：越谷市中央市民会館　第10会議室**